〔書評と紹介〕

Mitleid und Wunderkraft, Schwierige Bekehrungen und ihre Ikonographie im indischen Buddhismus (Harrassowitz Verlag, Wiesbaden 2006) 1-225pp. von Monika Zin

原　實

一般に宗教の開祖の生涯は、彼を慕う弟子達が伝える間に厖大な伝記文学を形成するに至るが、他面その生涯の幾つかの場面は芸術家の創造意欲を誘って絵画彫刻を産み出した。それはイエス伝の中の受胎告知、生誕、十字架上の死、復活等に見られるが、仏伝に在っても事情は全く同様で、それは托胎図、誕生図、降魔成道図、涅槃図等となっている。

伝記と図像の比較比定研究は、文献学と美術史学の接点としてインド学の初期から学者の関心を呼び、19世紀後半西欧に在って A. Grünwedel, J.Ph.Vogel, A.Foucher 等の碩学の輩出を見、本邦でも高田修博士がこの分野に貢献した。近時栗田功氏は系統的に図版を整理解説して内外研究者に多大な便宜を提供した[1]。

ところで、佛の一代記は南北両伝の伝えるところとなったが、仏像仏画も南は Amarāvatī, Nāgarjunakonda から、Mathurā, Gandhāra を経て北は中央アジアの Kizil に及び、時代的にも西暦前一世紀から約千年の長きに亘っている。

併しながら、散在する伝記と図像の系統を学問的に跡付ける事は必ずしも容易でなく、優れた文献学者や美術史家の努力にも拘らず、尚未解決な問題が残っている。近くはドイツの München 大学に久しく講筵を張っていた Dieter Schlingloff がこの分野に貴重な貢献をしたが[2]、その学統を忠実に継承している学者として、ここに紹介せんとする Monika Zin 博士がある。筆者はもとより仏教学、美術史学を専攻する者ではないが、「説話と美術」の問題は高田修博士の業績を通して以前から少なからぬ興味を持っていたので、ここに本書を紹介することとした。

序文（Vorwort）（pp.1-15）に於いて著者は先ず、佛が超人的能力（Wunderkraft: *daśa-bala*）を具えていた事に言及し、それを彼が世の安寧福祉（*hita, sukha*）のために、悪者退治に用いた事例の九つある事を述べる。それらは彼がもと転輪聖王（*cakravartin*）の資質を具えていた事と無関係でないが、彼は更に悪者に常に慈心（Mitleid: *maitrī, mettā*）を以って対峙し、その結果彼等は調伏教化されて仏門に入った。次いで本論（pp.16-192）に入り、調伏の対象となった悪鬼3、悪獣2、悪人4の計9が全九章に亘って論じられる。彼等はもと貪瞋痴（*rāga,*

dveṣa, moha）の三毒の何れかに冒された「御しがたき存在（*durdamana*）」であったが、佛によって癒され、正しい道へと導かれた。その意味で佛は大医王（*vaiṣajya*）、又衆生を彼岸に渡す船頭（*nāvika*）などと称せられた。

各章は三つの部分から構成されている。先ず冒頭にイタリックで物語の「概略」（A）を述べた後に、その物語の「文献」（B）に見えるところを整理して提示し、最後に物語に対応する「図像」（C）を写真をまじえて解説し、その後に自ら「描き起こし」を試みている。「描き起こし」部分はその師 D. Schlingloff の技法を踏襲しているが、当該の図像の理解に資するところ極めて大である。以下に解説の便宜上、（A）（B）（C）の順序に従って概略、文献、図像のあらましを述べる。

（1）夜叉 Aṭavika

（A）Sutta-nipāta（181-192）と Saṃyutta-nikāya（X.2）に、夜叉と佛の対話が見える。佛が夜叉の住居に留まった時、夜叉は佛に三度に亘って退去と入場を命じ、佛はそれに従ったが、四度目に佛は拒否した。そこで夜叉は難問を以って佛に迫ったが、却って佛に教化されるところとなった。この古話を中核として後世巴利注釈文献は物語を様々に展開して行った。

（B）今 Buddhaghosa によってその展開を見ると次の通りである。鹿を追って森に入った Ālavaka 国の王は、同名の夜叉 Ālavaka に捕らえられ、夜叉は日々一人の犠牲を送り込む事を条件に、王を解放した。王は最初罪人、次いで子供を日々夜叉の許に送っていたが、最後に自らの王子を供する羽目に陥った。ここに佛が登場して夜叉の留守中その家に至り、怒って帰宅した夜叉と上記の三度に亘る問答となったが、夜叉は最後に教化されて王子を佛、次いで父王の手（*hasta*）に返還した。以後この王子は Hatthaka-Ālavaka と呼ばれる様になったと言われている。

その梵文原典は発見されていないが、同様の物語は僧伽羅刹所集経下、雑宝蔵経 8、出曜経12に伝えられ、又夜叉と佛の争いは古トルコ語にも翻案されたが（von Gabain）、後者は教化部分を欠く。

（C）併し全体として統一性を欠くこれら物語は、北伝に著しく影響された図像の出現によって補強された。図像は、悲劇の子を中心に展開し、子を夜叉に提供する夫婦を主題としているが、それは先ず Gandhāra に現れた。その中の一つは中央に樹下に座す佛、右側に王ではなく、明らかに商人と覚しき夫婦、左側に夜叉を据え、双方とも両側から子を佛に捧げている。又多くは生贄台を描き、その周辺に子を置く父と、それを受け取る夜叉を描く。それは又中央アジア Kizil（14, 17, 80, 114, 181, 224窟）に描かれている（Grünwedel）が、中国で Aṭavika は鬼子母神（Hārītī）と並んで子供を守る者として崇拝され（Peri）、インドネシアで両者は並んで描かれる様になった（Getty）。

（2）夜叉女 Hārītī

（A）漢訳仏典で訶利底薬叉女と訳され、本

邦で鬼子母神として知られるこの夜叉女がここに論じられる。

（B）Hārītī が最初に現れるのは、現在のパキスタンとアフガニスタンの境界領域に位し、Ekakūṭa-Stūpa 再建を告げる Oḍi 王、Senavarman の西暦一世紀のカロシティー碑文に於いてである（O.von Hinüber）。以後 Lalitavistara に500人の息子と共に佛に従う者として言及され、金光明経、法華経陀羅尼品その他に現れるが、彼女は巴利文献の古層には知られず、北伝に見る如き彼女の佛による改心も巴利後期文献には見えない。南伝では僅かに Mahāvaṃsa が彼女を夫 Paṇḍaka と500人の息子と共に改宗したと伝えているが、ここで改宗を促した者は佛ではなく、カシュミールの龍族を改宗させた長老 Majjhantika であったから、大島史の記述も北から輸入された可能性がある。併し北伝にあってもその出典箇所は限られ、その中でも義浄の根本有部毘奈耶雑事巻31が有名であるが、梵文 Bodhisattvāvadāna-kalpalatā もほぼ同一の物語を伝えている。他に佛本行経、雑宝蔵経、灌頂経、不動使者陀羅尼秘密法等に言及され、玄奘も物語を知っていた。今、義浄に拠ってその概要を見ると次の通りである。

Hārītā は前世で王舎城の子供を食う誓いを立て、その結果現世で500人の子の母親となりながら、この街の子供を盗んではそれを食していた。世人の嘆きを耳にした佛は、彼女の留守中に神通力を用いて末子 Priyaṅ=kara[3]を隠蔽すると、愛児を失った彼女は佛の許に来たり、説諭されて悪行を悔い、在俗信者となった。後に彼女は僧伽への食事の提供者、守護者となり、又古来の女神信仰と相俟って子供を疫病から守る女神として崇拝されるに到るが、Hārīta はもとバラモンの gotra の名で、その名を冠する法典（Hārīta-Dharma-Śāstra）や医書（Hārīta-saṃhitā）も存在するから、元来動詞 *hṛ-*（[子供を]奪う）から派生したものではなかったと思われる。

（C）図像は西暦前1世紀に遡る Kangahalli 村落（Karnataka）出土の Stūpa 玉垣に *yakhi Piyaṃkaramātā* に見るのを嚆矢とする。後世のインドの母子像には西方の影響が顕著であるが、Sanchī, Gandhāra, Mathurā には、尖った耳、牙、財布によってそれと知られる夜叉と並んで、子供を抱く夜叉女が、坐像立像の形で見られる。併し図像で彼女は恐ろしい悪女としては描かれず、従ってその改宗のモチーフも明瞭でないが、Ajanta 第二窟は中央に豪華な夜叉夫妻を座らせ、その右上に小さく、剣を右手にして佛を威嚇する四腕の夜叉女と、佛が末子を隠した鉢を、又左上に佛の前に跪く二腕の母子を描くから、そこには悪女回心のモチーフが知られていたと思われる。尚、Kizil 第4、80、171窟に佛と夜叉女、鉢に頭を擡げる子供が描かれているから、ここにも改宗モチーフが看取される。

（3）龍王 Apalāla

（A）西北インドに知られたこの龍王の物語は、三蔵法師の伝える所であったが、約30の Gandhāra と Nāgarjunakonda の浮彫は竜王の回心を描いている。

（B）漢訳仏典に阿波邏羅龍泉として知られる竜王の改宗物語は、Pali 古層には見えず、僅かに Samantapāsādikā や Āṭānāṭika-sūtra の梵文断片に、佛に随従する神々の中に現れるに過ぎないが、北伝、就中漢訳仏典に於いてこの龍は有名となった。委細を語るものは根本有部律薬事（大正24.40-41）であるが、菩薩本行経（大正3.116ac）、（大正25.51-2）、分別功徳論（大正25.51-52）、大智度論（大正25.126-7）等にも見え、法顕（大正51.858a）や玄奘（大正51.882bc）も物語を知っていた。龍王にその国土を荒らされた Ajātaśatru 王の求めに応じて、佛が Vajrapāṇi と共に竜王を訪ねると、龍王は出て来て佛を威嚇するが、却って斥けられる。龍王が自らの王宮に戻った時、佛は更に Vajrapāṇi に命じて岩山を粉砕させると、遂に神力に屈した龍王は王宮を後にして妻子と共に回心する。分別功徳論（大正25.51c-52a）は彼の前世物語を載せるが、それによると人民の為に天災を除いた一バラモン（玄奘: Gaṅgi）は、その労が正当に報いられなかった事を怨み、次生に Apalāla（無葉）と名づける龍となって報復せんと誓い、現世で雹霰を降らせて穀物の稔りを妨げていた。それを知った佛は Vajrapāṇi（密迹）、Ānanda、並びに神足隠形の Panthaka（般咤比丘）を伴って龍王と対峙し、これを調伏する。玄奘は又、佛が竜王に12年に一度「白水の災」を起こす事を許した故事を伝えている。

（C）互いに様式を異にしてはいるが、南北の浮彫は Vajrapāṇi を描いて、龍王 Apalāla の回心物語を伝えている。それらは紀元 3 世紀より主として Gandhāra に見出されるが、竜王による佛脅迫はそこには見えず、唯岩山を砕く Vajrapāṇi が躍動的に描かれ、又時に竜王と妻と息子の改心が見られ、それらは根本有部律の記述に近い。一方 Nāgarjuna-konda には 3 例があり、そこでは佛への脅迫に失敗して館に戻り、眷属に囲まれて王座に座す竜王と、*vajra* を岩に突き刺し、斜めに背を向けて立つ Vajrapāṇi が、対決の姿勢で躍動的に描き出されている。尚、中央アジアからはこの物語を伝えていると確定し得る図像は見出されていない。

（4）護財（Dhanapāla）

（A）Dhanapāla, Nālāgiri の名で知られる「酔象調伏」の物語は、数ある改宗物語の最たるものであるが、ここで象は号泣、平伏、自殺するなどと極めて擬人的に描かれている。佛による調伏も慈心（*mettā-citta*）によるものと、神変（*ṛddhi*）によるものとに二大別されるが、多くの図像は更にそれに先立つ象の都城乱入場面を描いている。物語は次第に有名となり、図像に写されると、実にそれは千年の長きに亘って生命を保った。

（B）この象の調伏物語は Devadatta による佛の暗殺計画に属するから、*Saṅgha-bheda* に言及する各派の律蔵文献は多少なりともこの物語に言及している。酔象の危険性（*caṇḍa, manussa-ghātaka*）が先ず前提され、舞台は王舎城、登場人物として提婆の他に Ajātaśatru、危険に在っても佛の許を離れなかった Ānanda が時に現れる。Avadāna-śataka は二つの伝承を伝え、第一（33）は

佛の *maitra-citta, hita-citta* による精神的なもの、第二（58）は五獅子（*siṃha*）、二火柱（*agni-skandha*）と一鉄岩（*ayomayī śilā*）の化作という神変（*ṛddhi*）によるものとである。それらは阿毘達磨大毘婆沙論、根本有部律、西域記、大智度論等の中に多様に変化し展開して行った。

（C）図像は時代的に西暦2世紀から千年にわたり、地理的にも Gandhāra, Mathurā, Amarāvatī に拡がっている。Amarāvatī, Nāgarjunakonda, Goli, Chandavaram のものは象の調伏前の都城突入による混乱と、調伏後の回心の両者を描くが、佛が象の頭に手を置く姿は南方には見えない。混乱と調伏の両場面は又 Mathurā に見えるが、Gandhāra では調伏後の象のみを描き、そこで佛は Vajrapāṇi や門人に付添われて、象の頭に右手を置いている。象は時に剣を鼻先に咥えているが、概して小さく描かれ、調伏場面が前面に押し出されている。「剣を咥える象」は中央アジアにも継承されたが、文献的には法蔵部の Ekottarāgama（増壱阿含経巻9．大正2.590a8-591a7）にその対応を見る[4]。但し両者を直接結びつけるには未だ問題が残っている。更に Peshawar の浮き彫りは象の排泄物をも描いているから、そこには五獅子や火孔化作による「象の恐怖」の名残が見られる如くである。一方、Ajanta17窟に左から右へ絵巻物風に順を追って描かれるものは、根本有部律の記述に近い。そこで象は象舎から引出されて都城に乱入し、最後に佛に帰依するという三場面によって描き出されている。降って Gupta 時代になると、佛礼拝像の嚆矢とされる Sanchī 石柱碑に象は更に小さく描かれ、佛の両側には阿難と帝釈天が侍っている。Gupta 期以後には Sarnāth の石柱碑があり、そこに佛の八大示現（*aṣṭa-mahā-prātihārya*）が描かれるが、そこでは佛は左に阿難、右に鐘楼の下に跪く小さな象の両者に囲まれている。以後佛の礼拝像の中に現れる護財は、立像の佛の右足下に付属物の如くになり、その矮小化はその後の Pāla-Sena 朝（8-12世紀）の美術にも継承された。

（5）Rājagṛha の黒蛇退治

（A）黒蛇調伏はもと、一瞥によって人を殺す Basilisk の征服話に由来すると思われるが、仏典では仏の毒蛇教化による人民救済の一環となった。併しそれは後世必ずしも有名、且つ重要なものとはならなかった。

（B）物語は Bimbisāra 王の歓待により、佛が迦蘭陀迦竹林（栗鼠の餌場［(*kalandaka-nivāpa*]）に滞在するところから始まる。王に接収された竹園のもとの所有者は王に怨みを抱き、来世に必ず毒蛇となって再生せんと誓い、今この園に住んで王を噛み殺そうと謀っている。梵文根本有部律破僧事によると、王はこの園に在って睡眠中、複数の迦蘭陀迦鳥（*pakṣin*）によって警告され、辛うじて難を免れた。同様の物語は Avadāna-śataka 52「黒蛇」（*kṛṣṇa-sarpa*）にも語られるが、それによると前世この都に吝嗇な富者があり、彼はその園に黄金を埋蔵したまま命終した為、同じ場所に毒眼（*dṛṣṭi-viṣa*）の黒蛇となって再生し、園に入る者を悉く睨んで殺していた[5]。王はこの旨をこの竹園滞在中の佛に

奏上するや、佛は翌朝竹園に入り、黄金の慈悲の光（*maitry-aṃśu*）によって黒蛇を照らすと、忽ち蛇の心は和み、教化される。ここに蛇の毒の眼光と、佛の慈悲の眼光の対比、後者の前者への優越が見られる。佛は彼が来世に地獄に落ちぬ様に財への執着を絶つ事を諭す。後、蛇は食を絶って命終し、三十三天に生まれ替ったという。物語は必ずしも有名でないが、後に西蔵に知られるようになった。

（C）その物語に対応すると思われる「蛇」の現れる図像は Gandhāra に 2 つ見える。そこで佛は、王、都人、Vajrapāṇi に囲まれ、蓮池や林を具えた園にあって鉢を右手にして描かれる。又その鉢の中からは、鱗をつけた蛇が覗いて見える。

（6）Aṅgulimāla

（A）教化され、仏門に入って阿羅漢果を得たこの大量殺人者の物語は、もと極めて単純明解な筋のものであったが、時代の経過と共に多くの要素が混入して、次第に複雑な様相を呈するに至った。その図像化はほぼ文献と同じ 2 世紀末より現れ、地理的にも Gandhāra から Amarāvatī まで広範囲に亘っている。文献と図像は相互に影響しつつ発展し、次第に有名になり、中央アジアの遺跡にも多様に描かれている。

（B）Thera-gāthā 866-891に佛弟子の一人として登場し、彼は佛と問答して、それが *ṭhito, aṭṭhito*（留まる、留まらず）の反意語となって後世の文献にまで残っている。Aṅgulimāla-sutta（MN.86）の伝える所に拠れば、彼は文字通り「殺した人の指を集めて鬘」とし、「血塗れた手」（*lohita-pāṇi*）を持つ「凶賊」（*hiṃsaka*）であったが、佛の神通力によって教化され、剣と弓を捨てて仏門に入った。彼は又「真実語」によって難産の婦人を救い、又危害に遭っても忍受を専らとしたとも伝えられる。併し彼の出家は僧伽内に不評で、佛も「悪名高き盗賊」（*dhaja-baddha cora*）の入門を以後禁じたと言われている（Vin.1.74）。

その系統図は赤沼辞典（pp.39-41）に簡潔明瞭に示されている通りで、阿含経38（大正2.280-1）、別訳雑阿含経（大正2.378-9）が簡単に紹介するに対し、鴦掘摩経（大正2.508-9）、六度集経（大正3.22-4）、賢愚経（大正4.373ff.）は彼の前世物語や因縁物語を付加して、彼の悪行の因を寧ろ他に帰している。因縁物語によると、彼はもとバラモン出身の温厚（*ahiṃsaka*）にして優秀な学生であったが、彼に恋慕した師の妻の讒訴に遭い、激怒した師は彼を地獄に落とす為に100人の殺害が梵天界に生まれる道であると説いた。邪道に導かれた彼は（法顕、玄奘）、99人の殺害を成就して100人目に自分の母親の殺害を企てると、ここに佛が登場して彼を回心させる。更に大乗央掘魔羅経は別様な解釈を与え、後世の Pali 注釈文献（Atthakathā）も種々に物語を変形して行った。何れにしてもこの不幸な殺人鬼の改宗は、極悪人にも救われる道のある事を示唆している如くである。

尚、Milindapañha II.4には数ある護呪の中に、安産のそれとして Aṅgulimāla-paritta が言及されている。

ところでこの Aṅgulimāla の物語は *Mahā-*

sutasoma--jātaka（Jātaka 537）の物語と無縁でない。Jātaka の序文と結文に見る様に、彼の前身は人食い（*porisāda*）であり、彼を回心させた者は菩薩の前身 Sutasoma であった。両人は夫々 Bārāṇasī 国と Indapattana 国の王子で、同じ師の許に学んだ仲であったが、前世の業の致すところ、彼は人肉に執着する様になった。その残虐ぶりはここで「指鬘」に替って「掌に穴を開けて（*hatthatalesu chiddāni katvā* [5.473.19-20]、*talā vuta* [5.497.9, 21, 503.12, 29]）倒懸の形で木に吊る」行為となっている。更に *ṭhito aṭhito* の反意語も J.537.23-4に見え、同類の表現もここに見られる。併し両者の一致は更に叙事詩14.55-7に見える Uttaṅka と Kalmāṣapāda の物語に我々を導く。本生話と叙事詩には「真実語」＝「約束（*samaya*）（遵守）」の概念が共通しており、また既述の *ṭhito, aṭṭhito* の反意句も *gamane sthāne*（MBh. 14.57.6-7）にその対応を見る如くである。これらの問題は将来更に研究の余地があるであろう。

（C）最古のものは（200AD）は Amarāvatī-Stūpa のフリースに見える。佛は中央に火柱となって象徴的に示され、その左に剣をかざす Aṅgulimāla、右に食鉢を運ぶ母が描出され、彼は再度平伏の姿勢で火柱の下に描かれる。今一つの浮彫では梵紐を付けた彼が剣をかざして左足で象を蹴飛ばしているが、仔細に見て行くと上方左には母を打たんとする彼、右には火柱の下に平伏する彼、更に僧伽と覚しきものがここに描かれている。併し僧団をより如実に示すものは Nāgarjunakonda の浮彫で、ここには彼の一代記が三段に分けて描き出されている。下段に彼の学生期（師とその妻も見える）、中段に剣をかざす彼の乱行が描かれ、上段では改心後梵紐を帯びた彼が食鉢を頭に載せた母と共に佛を拝しているが、師の妻の存在は六度集経を想起せしめる。Mathurā からも一例あり、ここでも佛は火柱でなく、人間の形を取っている。一方 Gandhāra には10指に余る図像があり、ここで「指鬘の冠」と「剣」の二が彼の徴票となっている。それらの中には、襲いかかる彼に対峙する佛、その両側に Vajrapāṇi と皿を持つ母が侍っているもの、彼が髪を掴んで母を討とうとしているものがある。同一場面に凶悪な彼と、指鬘の冠と剣を投げ出して平伏する彼を描くものも稀でない。Ajanta 17窟にも攻撃的と平伏的な彼が同時に二度描かれ、佛は蓮の上に立つ。

中央アジアの Kizil にも同様な図像が数多く残存しており、或る者は剣をかざす彼と、その母とが佛を囲み、又時に二度現れて改悛前後の彼、又或るものは更に入団後の彼をも描き出している。

文献の多様に比し、図像は限られているが、図像上の母の出現はそれらがより発達した、恐らくは北伝の物語を反映している様に思われる。

（7）邪教徒 Śrīgupta（勝密、徳護、室利笈多）

（A）主として Gandhāra に見られる10ばかりの浮彫は、一般にはさして親しみのない Śrīgupta の物語に属しているが、邪教徒の

師匠の屈服はそれなりに興味をそそる主題となっていた事と思われる。

（B）異教徒による佛の焼殺、毒殺の試みがここに語られ、佛の一切智が邪教の師の智慧を凌駕する事態を、Śrīgupta の改悛に事寄せて物語っている。大荘厳論経13によると、外道師富蘭那（Pūraṇa）の徒であった彼は Jyotiṣka（聚底色迦）の姉を娶るが、義弟は以前から義兄を佛の教えに導かうとする。或る日義兄の Śrīgupta は、自分の師が、遠方遥か猿が Narmadā 河に落ちるを見て笑い、その智恵の優れた事を讃えた。Jyotiṣka は義兄の師を自家に招き、彼を饗応するに飯の下に糞を隠した鉢を以ってした。外道師は隠されている糞を発見出来ぬまま、糞の在り処を彼に訊ねるに及んで、Jyotiṣka は「遠くを見るも、近くを見得ず」と言って笑い、彼が一切智者でない事を暴露した。これを見た義兄は今度は佛の一切智を試そうと、極めて残忍な方法を用いた。先ず彼は妻を牢中に閉じ込め、佛の食事に毒を盛り、門前に大火坑を造ってこれを灰で覆い、斯くして佛の毒殺、焼殺を謀った。天人の警告にも拘らず、佛がその招待を受けて家に入ろうとすると、火坑は忽ち変じて蓮池となった。これを見て驚き、彼は仏に帰依したと言われる。

大同小異の物語は十誦律、徳護長者経、大智度論、雑譬喩経にも見え、法顕や玄奘にも語られるが、梵文の Bodhisattvāvadānakalpalatā も大筋に於いて大荘厳論経（*Kalpanāmaṇḍitikā*）と同一の物語を伝えている。巴利と西蔵の伝承は王舎城に替って舎衛城を出すが、これは Śrīgupta を Anāthapiṇḍika と混同した結果であると思われる。又、法句経58-9に対する注釈部（Dhammapadatthakathā）は Siriputta を仏教徒、Gārahadinna をジャイナ教徒として、同じような二つの招待物語を伝え、後者を火坑の作者としているが、彼も佛の神通力を見て改心し仏に帰依した。この様に南伝は北伝と部分的に異なっているが、両者はもと、今は失われて伝わらない「佛の一切智強調物語」に淵源していると思われる。

（C）物語の図像化が Gandhāra に見出される事は夙に A.Foucher の指摘した所であった。その或る者は右に火坑、左に食事場面を提示し、共に佛の神通力を暗示しているが、多くは火坑部分のみを提示している。佛の足元に描かれる蓮が物語と図像の同一性を示す決め手となっているが、中には改悛後、佛の足下に平伏する主人公の他に、裸形のジャイナ教徒、鉢を手にした彼の妻や、義弟の Jyotiṣka も現れる。併し Gandhāra 以外にこの物語は図像化されなかった様で、確実にそれと断定出来るものは残っていない。

（8）バラモン苦行者 Kāśyapa 兄弟

（A）賢明なバラモン苦行者として尊敬をその一身に集めていた Kāśyapa とその弟、並びに彼等の500人の弟子の教化と出家は、それ自体仏教教団史上の重要な出来事であったが、それは文献上でも図像上でも、改宗物語中の最たるものの一つとなっている。このバラモン教に対する仏教の優位確立を意図する中核物語の上に、多数の挿話が追加されて行ったが、その中でも「火」乃至「火蛇退治」の

モチーフは終始重要な要素となっている。文献同様、図像も極めて多数で60種を下らない。最古のものはSanchīに見られるが、大多数はGandhāraに見え、最も新しいものはAjanta及び、中央アジアに見られる。

（B）Thera-gāthā 375-380に現れる彼は、三兄弟の長兄として、もとバラモン結髪行者で火を祀り、神通力を行使し得る者として阿羅漢（*arhat*）を自負して尊敬を集めていたが、佛の神変（*ṛddhi*）の前に屈し、500人の弟子と共に仏門に帰依した。著名なバラモン行者が多数の弟子と共に仏門に帰依した事は、仏教教団形成史上にも重要な事件であったから、巴利大品（Vinaya 3.24-35）を始め、根本説一切有部、化地部、法蔵部の律（Mahāvastu [3.424-434]）や、各種巴利注釈文献にほぼ同じ形で伝えられている。

その中でも彼の改宗に最も決定的であったものは、佛が一夜をそこで過ごした火堂（*agny-āgāra, agni-śaraṇa*）に於ける、毒蛇（*āśīviṣa nāga*）の調伏に他ならず、それは多くの物語の冒頭に語られ、幾つかの伝承はこの毒蛇の前世を物語っている。この蛇は以前Kāśyapaの弟子の一人であったが、重病の故に他の弟子達から隔離されたまま孤独の内に命終した。死に臨んで彼は次生に必ず毒蛇となって同じ場所に再生する誓いを立てた故に、今この苦行庵に住み着く事となった。堂中の佛と蛇の戦いは先ず後者が火焔を吐く事より始まり、佛は「火三昧」（*tejo-dhātu-samādhi*）に入って神変（*ṛddhi*）を起こしてそれに対抗する。火焔に包まれながら堂内に仏が焔の中に坐すのを見てKāśyapaは佛が当然焼死したものと思い、弟子達も水で消火に勤めるが、佛は蛇を調伏して鉢に入れ、彼の前に提示した（太子瑞応本起経［p.481a］、過去現在因果経［p.646a］）。多くの物語は更に神々の佛崇拝や、苦行者達による佛への攻撃とその失敗を語って、佛の神変力を強調しているが、その間に佛の「他心知」や「起雲踏水」の故事等も伝えている（玄奘）。著者も指摘しているように、このバラモンKāśyapaはMBh.1.46以下にNāga Takṣakaとの力比べの物語に現れる。苦行者Śṛṅginの呪詛を蒙って、蛇に殺される運命にあったParikṣit王を蘇生させる術を心得ていたこのバラモンも、蛇王に巧みに買収されるままに王は結局蛇に噛まれて死ぬ。大蛇調伏の力を持つこのバラモン行者Kāśyapaをも教化入門させたという物語の仏教的変容に、佛の優位強調の意図を我々は看取するであろう。

（C）それは先ずSanchīの浮彫に三度び描かれる。それらは火を祀るバラモン苦行者の群れ、毒蛇と火三昧中の佛との戦いとその調伏、Bimbisāra王の訪問を描いているが、そこで佛は唯その座や経行（*caṅkrama*）の場として象徴的に描かれるのみである。二つのAmarāvatīの浮彫断片は苦行者達による佛崇拝、彼等の改宗を描いているが、ここでも佛は足跡、経行所、火柱によって象徴的に示されているに過ぎない。恐らくこれらは古い律（Vinaya）の記述に基づいているのであろう。Nāgarjunakondaには火堂に於ける佛と蛇の戦いを伝えると思しきものが一つあるが、約50例はGandhāraに見られる。ここで火堂、最初説法の続き場面、出家者の

存在の三者が、Kāśyapa のそれと知らしめる決め手となっている。その他、火焔中の佛、毒蛇の調伏と鉢内提示、苦行者達による消火作業等の躍動的描出もここに顕著であるが、その文献的基礎は Mahāvastu、佛本行集経41（迦葉三兄弟品）にあったと思われる。Ajanta 第 9 窟にも神々、苦行者、出家僧に囲まれた佛、消火中のバラモン苦行者達と鉢から首を擡げる蛇が、順を追って描かれている。それは又中央アジア Kizil の洞窟画にも見られ、何れも上半身を蛇にとぐろ巻きにされながら毒蛇を調伏する佛を真ん中に描き、池から水を汲んで山腹から火堂の消火に努めている苦行者達も見えるが、これら多くは Gandhāra や Ajanta の形式を踏襲している。

（9）Nanda

（A）佛の異母弟 Nanda の物語は、回心というよりも寧ろ愛欲（*kāma-rāga*）に迷う彼の教化と彼の解脱を語る。その図像はインドでは 2 － 5 世紀の間に見えるが、馬鳴の詩作の影響の下、芸術的にも優れたものが多い。

（B）物語は Thera-gāthā 157-8の彼自身の告白に遡るが、より具体的には Udāna 3.2の散文部に語られる。美しい妻を忘れえぬ彼を、佛は天に導いて500人の天女を見せると、彼は妻を忘れて天女を欲する。佛は梵行に専心すれば天女を獲得し得ると説き、彼は只管梵行に住するが、その間に解脱への道を悟る。巴利注釈文献は多くを付け加えないが、図像の解釈に資する部分もある。Aśvaghoṣa はその Saundarananda によって難陀の出家と、妻への未練、天界顕示、回心の顛末等を美しく歌い上げたが、彼の拠った資料を明確に辿る事は出来ない。雑寶蔵経等の北伝の伝える所は概ね馬鳴に拠っているが、佛の地獄示現等、部分的に増広した部分もある。併し各種北伝の相互関係を系統的に確立する事は不可能で、恐らくこれら凡ては今は失われた或る共通の一者に淵源するものと思われる。

（C）それを難陀と特定し得る要素は、盛装して鉢を手にし、佛に従い行く彼の姿と、妻の調髪と彼の剃髪にみられる「髪」である。前者は Bodhisattvāvadānakalpalatā に顕著で、ここに我々は図像が文献に影響を及ぼした事例を見る。

それと確定される30余りの作品の中、最初のものは 2 世紀末に Gandhāra と Amarāvatī に現れた。Amarāvatī の浮彫の或るものは、三段に分けて下から順次物語の進展を描く。最下段は二つに仕切られ、右に鉢を持って佛に従う Nanda、左に妻の化粧を手伝う彼、中段に佛の説法を聴く彼、最上段に Indra を始めとする神々や、左上に佛と彼と雌猿を描いて天界を示している。又或るものは髪をすく妻の姿を描き、そこには巴利注釈文献の伝承や Saundarananda の影響が看取される。

明かに Saundarananda に拠るものとしては Nāgarjunakonda の Stūpa-Panel の浮彫があり、ここには四面に亘って右から左へ彼の在家時代、佛の説法、天界飛翔と一眼の雌猿、剃髪出家が描かれている。同様なものでより詳細な描写は Goli の浮彫にも見える。

Gandhāra からは22種が採集されるが、全体を通した物語はなく、多くは特定場面を描いている。或るものは、鏡や化粧箱の前で座

して女中達に髪をすかせる妻、Vajrapāṇi に先導される佛と鉢を持って佛に従う Nanda を描き、又或るものは同一場面に佛を礼拝する彼、地に伏す傷心の彼、回心の彼と、同一人を三度描く。他に、逃亡を企てる彼、佛と共に天界に飛翔する彼、理髪師による彼の剃髪場面を描くものもある。5 世紀後半には Ajanta にも彼の物語が伝えられ、16窟には Saundarananda から物語の12場面が描かれ、19窟にも判然としないがそれに類似するものが見える。物語自体はトカラ語文献にも伝えられたが、その図像は不思議にも中央アジアには知られなかった如くである。

最も後期のものは Borobudur に在り、物語の 3 場面が描出されている。一場面は鉢を手にして佛に従う彼を描き、今ひとつは右端に托鉢中の佛と阿難、中央に二人の女中、左端に化粧中の妻とそれを手伝う彼を描き、何れも明かに Saundarananda 第四章の影響下にある。他に天界飛翔、阿羅漢となった彼も描れている。

巻末は原典出版と第二次資料の文献目録（pp.193-207）に始まり、次いで梵文、巴利原典、漢訳仏典の出典箇所がアルファベット順に列挙され（pp.209-213）、更に序章と全九章に掲げられた図像の出典箇所が明示され（pp.215-217）、最後は索引で終わっている（pp.219-225）。

結　論

以上、著者は275種類の絵画彫刻を、同類の文献と比較しながら、佛の「慈悲と神変」を主題とする九つの回心物語を解説した。図像は西暦 2 世紀（迦葉三兄弟）から12世紀（護財）まで千年に亘り、南は Amarāvatī, Nāgarjunakonda, Goli から、北は Gandhāra に及び、南北の両派は夫々の特異性を堅持しつつも、同一の文献伝承に拠っている。時に南の図像が北伝の文献に拠っている例も見られ、又時に美術が文献に先行すると思われるものも幾つか見える。著者は最後に横軸に本書で扱った 9 主題、縦軸に Sanchī, Gandhāra から中央アジア、Borobudur に至る13の図像の出所を表示して、それらの分布を一目瞭然たらしめている（p.191）。

物語の素材は Suttanipāta（Āṭavika), Dhammapada（Dhanapāla), Theragāthā（Aṅgulimāla, Kāśyapa, Nanda）等、仏教文献の古層にまで辿り得るものもあり、Hārītī, Apalāla の如く、南伝に知られず、極北にのみ限られていたものも存在する。

ここに論ぜられた佛による悪者調伏物語と、彼等悪人の前世物語とは文献に普く知られていたものであったが、芸術家はこの文献の特殊場面を更に「慈悲と神変」を強調しつつ絵画彫刻に継承して行ったのであった。

最初、標題を見て“Mitleid”に Pali *mettā*, Skt. *maitrī* を、又“Wunderkraft”に *ṛddhi* を想定した筆者は、L. Schmithausen の“Maitrī and Magic”（Wien 1997）への言及が本書に全くないのを不思議に思ったが、読み進むにつれて著者の意図が別のところに在る事を理解した[6]。

何れにしても、先人の研究を綿密に追いながら、ここに実例を明示して文献学と美術史

学の接点を極めて学問的に明示した著者の努力は高く評価され、今後の研究に貢献する所極めて大なるものがある。唯、文献部分（B）に於いて著者が漢訳に言及する際、S.Beal, E.Chavanne 等の旧著に拠っているのを見ると、望月信享「仏教大辞典」、赤沼智善「印度仏教固有名詞辞典」、中村元「ゴータマブッダ」を参照し得る我々は、そこに尚追加補強され得べき余地が残されているのを見る。著者は註の中でしばしば本邦の高田修、栗田功、田辺勝美、榎本文雄氏等の論著に言及しているから、今後この分野に於いて本邦学者との協力が期待されるであろう。

注

（1）I. Kurita, Gandhāran Arts I, The Buddha's Life Story (A revised and enlarged edition (Tokyo 2003).

（2）同氏の大著"Studies in the Ajanta Paintings"(Delhi 1987) については、嘗て「東洋学報」第74巻第3-4号 pp.01-08.（1993年3月）に紹介したことがある。

（3）この子の名前は巴利文献に見える。Cf. Saṃyutta-nikāya X.6-7.

（4）大正2.590c10-11:「鼻帯利剣」c26:「即自解剣」Cf.also, c20-21「及見火抗。即失尿放糞」、c27「世尊伸右手摩象頭」尚、剣を咥える象については、Zin, Der Elephant mit dem Schwert. Festschrift D. Schlingloff. (Reinbek, 1996) pp.331-44参照。

（5）Cf. J. Gonda, Eye and Gaze in the Veda (Amsterdam 1964).

（6）筆者も以前「慈心」「慈三昧」の効力について論じたことがある。国際仏教学大学院大学研究紀要第3号（2000）pp.9-47。